

ご紹介資料

桂春蝶

落語で伝えたい想い。

シリーズ 4

三代目
桂春蝶

ニライカナイで逢いましょう
〜ひめゆり学徒隊秘抄録〜





桂春蝶 落語で伝えたい想い。

桂春蝶「落語で伝えたい想い。」シリーズ第4弾。

桂春蝶 本人がとにかく心を揺さぶられ、感動した話を題材に落語という表現方法で伝えていくのがこの「落語で伝えたい想い。」シリーズ。

シリーズ1作目は特攻隊をテーマにし明日がある事の素晴らしさ、命の尊さを描いた『明日ある君へ～知覧特攻物語～』

2作目は日本とトルコの友好の始まりとされるエルトゥールル号遭難とテヘラン邦人救出劇を描いた『約束の海～エルトゥールル号物語』

3作目は樋口了一氏の楽曲『手紙～親愛なる子供たちへ～』をモチーフにした父と息子の物語。

そして、待望の4作目は『ニライカナイで逢いましょう～ひめゆり学徒隊秘抄録～』
沖縄戦で負傷兵の救護をしたひめゆり学徒隊にまつわる物語です。

2017年1月20日 大阪にて初演。



桂春蝶 落語で伝えたい想い。

～桂春蝶からのメッセージ～

私の「落語で伝えたい想い」シリーズもこれで4作目となります。

一人一人が持つ命の意味、ありがたみや温もりを、落語という表現方法をもって伝えてまいりました。

今回、題材に選ばせていただいたのは、先の大戦にて20万人余の犠牲を出した沖縄戦。悲惨極まる状況下の中で、その若き命を散らした、ひめゆり学徒隊員と看護婦長に纏わるお話を聴きいただきます。

戦争という、余りにも大きなテーマに挑む本作ですが、わたしの想いといしましては「命」そのものを考える、そのきっかけの作品になればと願っております。

誰もが生きる今日という一日は、志半ばにして逝かれた全ての方々が生きたかった一日。「一つ一つのその命には、大きな意味が込められている。」その想いを、桂春蝶、心を込めて演じます。

皆様是非、大切な人を思いながらこの一席をお聴きくださいませ。

<三代目 桂 春蝶 プロフィール>

1975年 1月14日生まれ 大阪府出身

1994年 三代目桂春團治に入門。

初舞台は、父である、故「桂 春蝶 追善興行」

1997年 浪花座初出演

2007年 なにわ芸術祭奨励賞受賞

2009年 三代目 桂 春蝶襲名

なにわ芸術祭審査員特別賞受賞 / 繁昌亭大賞爆笑賞受賞

2010年 大阪成蹊短期大学/表現文化学科 非常勤講師を経て

2012年 大阪成蹊短期大学/創造文化学科 客員教授に就任

2014年 平成25年度「咲くやこの花賞」大衆芸能部門受賞



実父である二代目桂春蝶の死をきっかけに落語家になることを決意。

翌年、三代目 桂春團治に入門。故 桂春蝶三回忌追善興行にて初舞台を踏む。

2009年に開催された三代目桂春蝶襲名披露公演は大阪松竹座、京都南座をはじめ全国20ヶ所で行われ、各地でチケットが完売。2011年東京に拠点を移しテレビ・ラジオ、講演活動にも活動の場を広げ、近年は国内だけでなく、韓国、台湾、ベトナムでの落語会も成功をおさめ、文化の違いを超えて落語の世界を海外に広めている。2014年 芸能生活20周年記念公演として独演会や「桂春蝶の落語で伝えたい想い。」をシリーズ化し、「伝承落語」として新作落語を披露。また、落語の新境地を切り開くため伝統芸能、音楽など多彩なジャンルとのジョイントにも積極的に挑戦して参り、20周年記念公演の締めくくりとして、芸能生活20周年記念特別公演として、2015年2月 大阪・フェスティバルホールにて上方落語家として初の独演会を開催。2700席完売

テレビ・ラジオ出演情報

●ラジオ関西「桂春蝶のバタフライエフェクト」

メインパーソナリティ

毎週火曜日10：00～15：00生放送

[illegible]

■「いのちの落語」をお届けします■

ひめゆり学徒隊がテーマとなっているが、何度も足を運んで生き残られた方々の話を聞き、また、シリーズ第一作目の「明日ある君へ知覧特攻物語」を全国で演じ感じたこと、取材してきたことも今回の作品、「ニライカナイで逢いましょう ～ひめゆり学徒隊秘抄録～」としてまとめ上げました。春蝶が伝えたい思いシリーズで生み出した共通するのは“命”です。

今回の制作、取材では多くの出会いが生まれ、いつくもの言葉があふれました。重層的に仕上げられた物語が、ひめゆり学徒隊の先生だった女性の口を通して語られるという構成で、春蝶の亡き父親(二代目春蝶)への思いと、その一つひとつを紡ぎ合わせた作品になっております。

初演をお聞きいただいた方のアンケートには「まるでひめゆりの生き残りの方々から直接話を聞いているかのよう。」「悩み事、辛いことがある中でこの作品を観たことで今後の生き方が変わった。」などの感想をいただきました。

また、取材をさせていただいた方の中には、過去誰の取材も受け付けず、体験を語ることを一切しなかったが、取材後「自分たちは高齢でもあり、まもなく戦争の語り部としての存在を終えることになる。この噺を語り継いでもらいたい」ということを言って頂きました。

「いのちの落語」

是非、みなさまの街、学校、企業でこの作品を数多くの方々にお聴きいただければ幸いです。